

# 各界でご活躍中の本学OB・OGから 新入生へのメッセージ

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。みなさんに、文化活動の第一線でご活躍中の先輩方よりお祝いと激励のメッセージが届きました！

仲間と喜びや苦勞をともにし、自分がこれぞと思うことにとことんまで打ち込んで切磋琢磨していく——。日本の文化を牽引している先輩方の原点も、創造的で既成のものに甘んじない早稲田のサークル・文化活動にありました。先輩方はメッセージをつうじて、多くの人間と出会い・新しい世界に飛び込んでゆけ、と新しく早大生になったみなさんの背中を押してくれています。

ぜひ先輩方の熱い思いを感じてください。そしてサークル部室の扉をたたこう！

(五十音順に掲載)



俳優  
安藤玉恵さん  
p.18



演出家・俳優  
白井晃さん  
p.21



歌人  
伊藤一彦さん  
p.18



歌人  
俵万智さん  
p.21



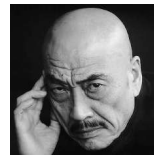
映画監督  
小栗康平さん  
p.19



狂言師  
野村万作さん  
p.22



講談師  
神田紅さん  
p.19



舞踏家・俳優  
磨赤兒さん  
p.22



歌人  
佐佐木幸綱先生  
p.20



漫画家  
やくみつるさん  
p.23



俳優  
佐藤B作さん  
p.20



児童読物作家  
山中恒さん  
p.23

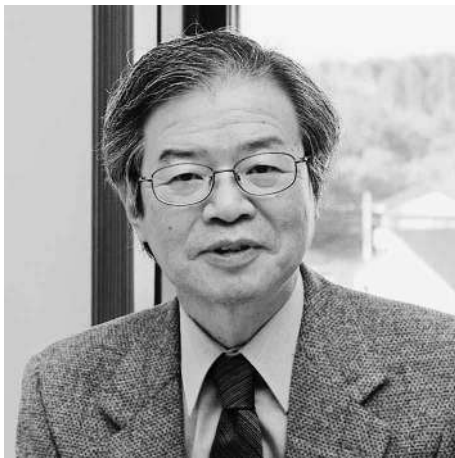
# 安藤玉恵さん

俳優 あんどう たまえ

(プロフィール) 1996年早稲田大学第二文学部入学、2000年卒業。在学中は「早稲田大学演劇倶楽部」に参加する。

映画『夢売るふたり』(12/西川美和監督)で第27回高崎映画祭最優秀助演女優賞を受賞。主な出演に、連続テレビ小説『あまちゃん』『らんまん』、ドラマ『阿佐ヶ谷姉妹ののほほんふたり暮らし』(以上NHK)、『深夜食堂』シリーズ、映画『PERFECT DAYS』、CM『東京ガス』、舞台『スプーンフェイス・スタインバーグ』『桜の園』『阿修羅のごとく』『命、ギガ長ス』などがある。

入学当初、私は、何か表現がしたくて、でもそれが何なのかわからずに、いろんなサークルを覗いていました。音楽系、文芸系、映画系、得体が知れないけど何やら面白そう系など。結局、迷いに迷って6月くらいに演劇倶楽部の一員になった記憶があります。あの時思い切って、新人稽古に参加して良かった。変な人がいっぱいいたし、自分の衝動にも素直になれた。今だに、新鮮な気持ちで演劇をやってるのも、エンクラでの衝撃的な日々が太い根っこになっているから。就活のためにサークルに入って人脈を広げるというのも手だし、自分の好きなことをバカみたいにバカになって話せる一人に出会えるチャンスもサークルにはあります。面白いものに出会えますように。



サークルに入らなければ、学費の半分はドブに捨てるようなものだろう。ぼくはドブに捨てないでよかったモウケモノだ。

文学部の西洋哲学専攻だったが、卒業後に哲学者にならなかった。しかし、WUS(世界大学奉仕団)の早稲田サークルに入ってカウンセリングに出会ったことがきっかけで、その後スクールカウンセラーになった。また早稲田短歌会に入って短歌の魅力を知り、今は新聞や雑誌の短歌欄の選者をしている。自分の生涯の二つの仕事、カウンセリングと短歌は、そもそもサークルで学んだものなのである。

学費をドブに捨てるというモットイナイことをするな。自分にならず合うサークルがあるのが早稲田なのだ。

# 伊藤一彦さん

歌人 いたう かずひこ

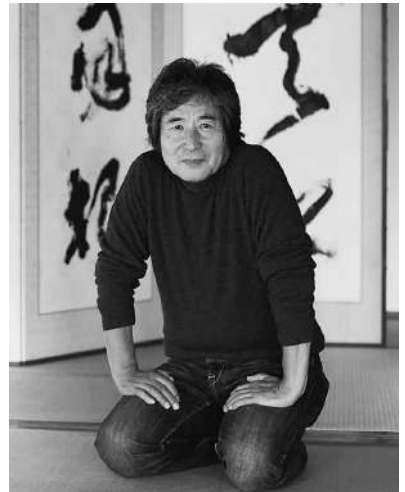
(プロフィール) 1943年、宮崎県生まれ。歌人、若山牧水記念文学館館長。毎日新聞、西日本新聞等の選者。1995年、第6歌集『海号の歌』で読売文学賞、第9歌集『新月の蜜』で寺山修司短歌賞、第10歌集『微笑の空』で逕空賞を受賞。最新歌集に『言霊の風』。現在、若山牧水賞他の選考委員。著書に教え子で俳優の堺雅人との対談集『ぼく、牧水!』(角川書店)、編著に『若山牧水歌集』(岩波文庫)等。

# 小栗康平 さん

映画監督 おぐり こうへい

(プロフィール) 1945年群馬県生まれ。早大第二文学部演劇専修卒業後、フリーの助監督として浦山桐郎、篠田正浩監督らにつく。81年「泥の河」で監督デビュー。この作品でキネマ旬報ベストテン第1位、毎日映画コンクール監督賞など数多くの賞を独占。海外でもモスクワ映画祭銀賞を受賞、アメリカ・アカデミー賞の外国語映画にノミネートされるなど高い評価を受ける。90年島尾敏雄の「死の棘」を映画化。カンヌ映画祭で「グランプリ・カンヌ1990」と「国際批評家連盟賞」をダブル受賞する。96年にはオリジナル脚本による「眠る男」を発表。これまでの映画話法を根底から覆す作品となり、モントリオール映画祭審査員特別大賞を受賞。05年「埋もれ木」。2015年「FOUJITA」を公開。

大学は人と出会うところ、だと思ふ。君たちはたぶん、全国のいろいろな土地から来たはずだ。大学に入るまでに、考えてきたことも、迷ってきたことも、それぞれずいぶん違っているだろう。だからおもしろい。誰と、どこで出会うか、だ。そのためには、サークルは欠かせない。私は学生のとき、自分のウロウロした精神を、そこで見つめた。そこでいっしょにウロウロした友人は、今でも生涯の友だ。あわてて形になることを求めることもない。ほんとうに人と出会うこと、それだけが大事だ。



入学式の当日に、郷里の母と一緒に、演劇研究会(劇研)の門を叩きました。出て来た先輩が、入学式の日に親と一緒に来るなんて過保護だと、後々まで言われたのを覚えています。学生演劇をやりたくて早稲田を選び、オーソドックスな「劇研」を選びました。浅間山荘事件の頃で、連合赤軍の永田洋子が「総括」したように、新入生の中でいち早く部員になった私が、肉体訓練の指揮をして、劇研の永田洋子と呼ばれながら女優になる道を模索していました。今は亡き三浦洋一君や平田満君が同期で、劇研から前年に分かれた「劇団暫」に居て、そこにつかこうへいさんが出入りして「郵便屋さんちょっと」の本邦初演は劇研のアトリエで上演されました。本番に至るまでのプロセスを見ることができ、それこそが劇的でした！すっぴんでキラキラしていた私の原点の時代です。あの頃の肉体訓練のうちの顔や舌を動かすメソッドは、今も講談教室の基本訓練として活用しております。

# 神田紅 さん

講談師 かんた くれない

(プロフィール) 福岡県出身。早稲田大学商学部中退後、文学座付属演劇研究所を経て女優の道を歩き始めるが、昭和54年講談師・二代目神田山陽の語り口と講談の魅力にとりつかれ門下生となり神田紅を名乗る。平成元年真打昇進・本牧亭にて昇進披露興行。その特異なキャラクターを活かした「芝居講談」という新しいジャンルを開拓、明るく楽しくわかりやすい芸風で、古典から現代ものまで幅広い作品を得意とする。講談のほかにも、女優、映画評論家、エッセイスト、レポーターとしても活躍。平成14年紅一門を旗揚げし、現在弟子は5人。講談の普及のため講談教室「紅塾」で東京、福岡合わせて100余名の生徒を熱心に指導している。平成13年～現在、全日空機内寄席のパーソナリティー放送中。平成29年度台東区「スターの手型」顕彰。現在日本講談協会会長。著書は「紅恋源氏物語」「語って紅伝」「女の独り立ち」など。

# 佐佐木幸綱先生

歌人 ささき ゆきつな

(プロフィール) 歌人。早大名誉教授。日本芸術院会員。早大文学部卒、短歌会出身。2009年3月まで早稲田大学政治経済学術院教授として教鞭をとる。歌集に『アニメ』(芸術選奨・文部大臣賞)、『はじめての雪』(現代短歌大賞)など。また、万葉学者、近代短歌研究者としても数々の作品を著す。俵万智さんの師としても知られている。

早稲田大学には、よりどりみどりの皆さんのサークルがある。日本の大学の中で数が一番多いだろうと思う。わたしのゼミの女子学生がフラメンコダンスのサークルを作るので顧問になってほしいと言ってきた。自分の入りたいサークルがなければ作ればいい。そこが早稲田の自由なところである。

私は高校までずっと運動部だったのだが、大学に入って、一転、短歌会に入った。窪田空穂、若山牧水、北原白秋…。早稲田といったら短歌会かな、といった思いがあった。短歌会に入ったおかげで先輩の寺山修司と知りあい、彼の死まで、ずっとつきあうこととなった。



私は商社マンに成ろうと思って、第一商学部に入りました…。サークルも外交学会に入り、英会話の塾にも通ってました…。それが一年生の六月には、劇団こだまに入部し、授業には一切出なくなり、最初は裏方でしたが、演劇漬けの毎日に急変してしまっていたのです!! 高校までの受験勉強一色の生活から、仲間達と夜遅くまで演劇の舞台を創っていくのに心を奪われ、そして稽古が終れば、高田馬場の安い居酒屋でお酒を頂いて騒ぐ事が私の20才の革命でした!!

そして私は今だに劇団を50年も続けて演劇を続けています。あの時のこだまの仲間達とも良いお友達のままです。

新入生諸君! 大学生活は人生の分岐点に成る大変な大事な時期なんだと言う事を忘れてはいけません…。そして何か自分が夢中に成れる事を見つけなくちゃいけない年頃なんだぜ!!

# 佐藤B作さん

東京ヴォードヴィルショー座長 さとう びーさく

(プロフィール) 早稲田大学在学中に演劇活動を始める。1973年、劇団東京ヴォードヴィルショーを結成。現在も主宰として、テレビドラマ、映画、舞台など幅広く活躍。主な出演作はテレビ「鎌倉殿の13人」「渡る世間は鬼ばかり」、映画「男はつらいよ 夜霧にむせぶ寅次郎」、舞台「ヘンリー四世」「ザ・空気 ver.3」「サンシャイン・ボーイズ」など。1986年「吉ちゃんの黄色いカバン」で第21回伊国屋演劇賞・個人賞、1999年「戸惑いの日曜日」で名古屋演劇ペンクラブ賞個人賞、2004年に第1回喜劇人大賞特別賞、2013年「パパのデモクラシー」「その場しのぎの男たち」で第48回伊国屋演劇賞・団体賞。2022年には第29回読売演劇大賞 優秀男優賞、第47回菊田一夫演劇賞を受賞。

# 白井晃 さん

演出家・俳優 しらい あきら

(プロフィール) 演出家・俳優。1957年、京都府生まれ。早稲田大学教育学部卒。1983～2002年まで遊●機械／全自動シアターを主宰。独自の美学による緻密な演出で高く評価される。第9回、第10回読売演劇大賞優秀演出家賞、2005年演出「偶然の音楽」にて、湯浅芳子賞（脚本部門）、2018年演出「バリーターク」にて小田島雄志・翻訳戯曲賞などの受賞歴がある。現在は演出家として作品を発表する一方、俳優としても舞台・映像で活躍中。近年の演出作品に「アルトゥロ・ウイの興隆」「マーキュリー・ファー」など。2016年～2021年、KAAT 神奈川芸術劇場芸術監督。2022年4月より世田谷パブリックシアター芸術監督。

早稲田大学は、私にとって生涯を左右する仲間との出会いの場所でした。演劇研究会でさまざまな人たちと出会った事は、自分と世の中との関わり方を見つけていく貴重な時間になりました。全国から集まってきた人間と時間を共有したり話したりすることは、自分の価値観や美意識を考えることでもあり、人にはいろんな考えがあるということ、その中には同じ考えを持つ人間がいること、全てをここで学びました。その仲間たちとの出会いが私を演劇に携わるきっかけを作ってくれました。相手と面と向かい生の声で話し合うこと。感情をしっかりとぶつけ合うこと。そのことによって、きっと自分とは何かを見つけられると思います。早稲田とはそんな場所なんですよ。



4年間、私はアナウンス研究会というサークルで過ごしました。サークルで出会った友人は今でも親友ですし、サークルを通して得た体験は本当に貴重なものでした。受け身でない学生生活を送るための拠点であり、何万人もの人がいる中での自分の「居場所」として、サークルの持つ意味は大きいと思います。ますますの充実した活動を文連に期待します。

# 倭万智 さん

歌人 たわら まち

(プロフィール) 大阪府生まれ。早稲田大学卒。86年「八月の朝」で角川短歌賞。翌年「サラダ記念日」で現代歌人協会賞。04年 評論「愛する源氏物語」で第14回紫式部文学賞。21年に「未来のサイズ」で遼空賞、詩歌文学館賞。長年の清新な創作活動と短歌の裾野を広げた功績により朝日賞受賞ならびに紫綬褒章。最新歌集は『アボカドの種』。

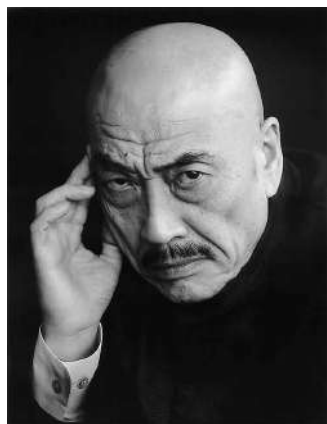


# 野村万作 さん

狂言師 のむら まんさく

(プロフィール) 狂言師。早大文学部国文科 1953 年卒。重要無形文化財各個指定保持者 (人間国宝)、文化功労者。日本芸術院会員。「釣狐」の演技で 77 年に芸術祭大賞、その他日本芸術院賞、紫綬褒章、坪内逍遙大賞、朝日賞、旭日小綬章など受賞多数。2002 年早稲田大学芸術功労者としての表彰をうけた。2023 年文化勲章受章。今年度も 4 月 16 日 (火) に大隈講堂で「早稲田狂言の夕べ」開催予定。

昭和 25 年に、狂言研究会を仲間とともに発足させ、実技の指導は私がいたしました。それから 75 年、現在に至るまで続けて来られたのは、運営が困難になったときに謡曲など他の研究会の仲間が力を貸してくれたお陰も大きいと存じます。舞台を観たり稽古をしたりするほかに、学問的な研究にも力を入れようと考えましたが、この面は時代によって積極的であったりそうでなかったりしています。今でも舞台を観てくれた卒業生と話をしますと、大学時代に培った芸術的・文化的な感性が、その方の生活を豊かにさせていると感じることがよくあります。他校の同じサークルとの交流など有意義なことは沢山あります。早稲田・東大・共立女子大・東京女子大の四大学の狂言研究会の集まりは、やがてお茶の水女子大学、成城大学を加えて現在は六狂連になりました。現在は、私の弟子が指導にあたり、各大学合同での発表会も催しております。又、卒業後も狂言の稽古を趣味として続けている人々もおります。亡き弟の万之介が学生諸君を可愛がり、その流れをよくお酒を飲んだことから万酔会と称し、現在も私が教えています。



新入生諸君！

例え、私のように早稲田に数ヶ月しか在学していなくとも、早稲田魂というものが宿っている。早稲田大学とは、そういう大学である。

この年齢になっても学友とは今も親しく、過去だけではなく未来についても語り合える仲間だ。いかに時代が変わろうとも、根底に流れる心意気なるものは不変に生きている。大いに満喫してくれたまえ！

# 磨 赤兒 さん

大駱駝艦主宰・舞踏家・俳優 まろ あかじ

(プロフィール) 1943 年生まれ、奈良県出身。早稲田大学文学部中退。1965 年、唐十郎の劇団「状況劇場」に参画。唐の「特権的肉体論」を具現化する役者として、1960～70 年代の演劇界に大きな変革の嵐を起し、多大な影響を及ぼす。1966 年、役者として活動しながら舞踏の創始者である土方巽に師事。1972 年、「大駱駝艦」を旗揚げし、舞踏に大仕掛けを用いた圧倒的スペクタクル性の強い様式を導入。「天賦典式」(てんぷてんしき：この世に生まれたことこそ大いなる才能とする)と名付けたその様式は、国内外で大きな話題となり、「BUTOH」を世界に浸透させる。精力的に新作を発表し続けているほか、舞踏手育成にも力を注ぎ、多彩な舞踏グループ・舞踏手を輩出。また、映画・TV・舞台等においても独特の存在感を放ち、ジャンルを越境し先駆的な地位を確立している。2006 年度文化庁長官表彰。2013 年第 7 回日本ダンスフォーラム賞大賞受賞。2016 年東京新聞制定 第 64 回舞踏芸術賞受賞。2018 年第 55 回批評家大賞・ダンス出版部門 (フランス) 受賞。2018 年春陽堂書店第 1 回種田山頭火賞受賞。2022 年第 76 回文化庁芸術祭大賞受賞。2022 年第 40 回ニムラ舞踏賞受賞。

# やくみつるさん

## 漫画家

(プロフィール) 漫画家。1959年3月12日(木)東京都世田谷区生まれ。早大商学部卒業。早大漫画研究会出身。政治・社会・芸能・スポーツ等、森羅万象をネタにヒトコマ・4コマ漫画を執筆。代表作に『ハロ野球ニュース』『やくみつるのおチャンコくらぶ』『やく・みつるのmana板紳士録』。現在、週刊誌・新聞に多数の連載をかかえ、ラジオのコメンテーター、クイズ解答パネラーとしても活躍。日本昆虫協会副会長も務めている。

私とてなにも漫画家になろうと早稲田へ入ったわけではないんですよ。ただ、早稲田大学漫画研究会には早稲田志望の段階から入部を考えていました。漫画の読書量はほぼゼロ。似顔絵こそ得手ではあったものの、漫画の実作経験もナシ。それでも漫研への入部を考えたのは、オモシロそうな奴が集まって来そうだと、の漠然とした期待のみ。40年以上も前の話ですが、当時は漫画愛好=オタクの図式はカケラもない時代。フランス革命の原動力となった「サロン」のような談論風発(→辞書で調べよ)の雰囲気を感じたからなんですね。実際に入部して、困むのはサロンの卓どころか麻雀卓ばかりだったけれど、やはり集ってきた連中はクセ者ばかりだった。要はココです。

流行りの言い方に倣えば「ワセダの文系はクセがスゴい！」——一生モノの出会いを求め、その渦に飛び込むがよろしい。せっかくあちらから手招きしてくれてるんですから。



小生などもしつこく5年も在学したのに、思い出に残ることといえば、学生会館内の部室での同好の士との交流ばかりです。小生が所属したのは、「早大童話会」(のちに早大少年文学会)ですが、ここで学んだことが、小生の生き方を決定しました。伝統を疑い、権威に背を向け、新たなる地平を拓くという姿勢を持続していき、燃え尽きて初めて人生を完結させるという考え方は、その時から今も変わりありません。それこそが文団連(のちに文連)の活動の中で培われた早大精神ではないかと思っています。輝ける若い後輩諸君の心で、文連の更なる団結と熱い交流により歴史的発展をしていただきたく、お祝いと希望のメッセージと致します。小生は今でも文団連を心のふるさとだと思っていますから。

# 山中恒さん

児童読物作家 やまなか ひさし

(プロフィール) 早大第二文学部芸術科55年卒。『あばれはっちゃく』『転校生』『ボクラ少国民』など著書多数。軍国主義下の教育の責任を追及する。